

西征雜詠（其二）：文苑

著者	笠間，梧園
雑誌名	龍南會雜誌
巻	3 1
ページ	5 7 - 5 8
発行年	1894-11-28
URL	http://hdl.handle.net/2298/4474

めをまよかへて郡をば、松浦と呼へれ文祿の、名古屋もさのみ遠からず、いつれも今の世の中に、よしある處ありければ、とふらふ袖も露繁し、

二十一 段

沖つ白浪うちよする、虹の松原れのづから、うよめく風の琴の音を、まどぬきく日はから錦、たうやく惜しきものところ、小城の櫻が岡の花、をりあらぬこそ恨まれ、ある聖をも伴ひて、見せたましうば見所の、あきものろはといひあまし、

二十二 段

天山に立つ碑は、麗せき阿蘇の大丈夫が、たうらの濱に敵をうち、來りてこゝにみよしの、とかどのみため潔さ、名をとめたる處あり、もしさかしまの世にあは、かくてぞ操立てつべき、かくてぞ國を興すべき、かくてぞみかどは護るべき、

西征雜詠（其二） 教授 笠間 梧園

宿松嶋枕上作

繞枕波濤吹晚風。喧囂恰與在船同。此身不是竄流客。一夜眠安孤嶋中。

旅寓獨酌醉中放歌

日暮海風吹髮生。豪氣勃勃欲鞭鯨。天涯官跡茫如夢。悔携筆硯入帝京。丈夫成名豈無

地。報國未必在簪纓。雪後孤竹色愈綠。雲裡

月光不傷明。却愧圭角未得磨。哦詩輒作不

平鳴。此夜肅々寒雨下。爐邊呼得酒一瓶。哀

絲豪竹彼一時。吟哦沈々獨自傾。醉裡乾坤

堪容軀。世途艱險未足驚。即今應學幽谷鳥。

深藏羽翼未放聲。自期他日遷喬處。和氣霽

然春滿城。

三到松嶋

寒濤拍岸響黃昏。春色尙遲海上村。他日因緣孤嶋雪。已留鴻爪第三痕。

三月某日訪本川氏于横尾山中

途上作

砲聲動地薩肥間。羽檄東西事太殷。却有吾曹無一事。探花訪友度春山。

宿本川氏此夜有雨

曾出田園事遠征。軟紅塵裡寄吾生。十年復結烟霞夢。一枕松風夜雨聲。

旅夜述懷

未賦一篇歸去來。十年萍跡尙天涯。數莖白髮入將老。何處青山骨可埋。身後休論名勒石。眼前須盡酒如淮。幾多感慨向誰吐。付與寒燈照我懷。

題大石良雄妓樓夜宴圖

綠酒紅燈夜漏遲。放歌酣醉擁冰肌。英雄最是苦心處。不在江城雪月時。

偶作

毫釐遂生千里差。何人敢不憶邦家。寄言南客須回首。前轍年來覆幾車。

紀念會をこどほきてよめる

本田弘

諸ともに心をたかく龍田山

ふみのほりつゝ祝ふ今日かき

年毎にいや榮えゆく小松原

國の柱の生もいてなむ

客舎夜雨

中内義一

夜はまづか

芭蕉をやぶる 雨の音

歸ると見つる 故郷の

夢を破りて

いとすこし。』

すき間もる